

基調講演

「人間家族の由来と未来 — ゴリラから AI まで」

京都大学総長・霊長類学者・人類学者

山極 寿一



■ 家族とは人間社会だけの普遍的な現象

みなさん、こんばんは。わたしは40年近くゴリラの研究をしてきました。そのテーマは一貫して「家族の由来を探る」ということです。今日はそこから少し大きなトピックを扱いたいと思います。

家族とは、人間社会だけの普遍的な現象なんです。でも、人間だけじゃないと、みなさんは考えておられると思います。確かに鳥にも、生涯ペアを作って暮らす種類がいるし、オオカミやキツネは夫婦仲睦まじく暮らします。これらも、形としては人間の家族に似ています。だけど、背景が違います。

鳥は子どもをおなかの中で卵として育てますが、卵は数時間から数日で体の外に出てきます。その卵を温めるのは、別に母親でなくてもいいんです。父親でもいいし、人間が温めても孵化します。でも人間は哺乳類だから、おなかの中で何カ月も子どもを胎児として育て、生まれてからも、お乳をやり続けなければなりません。背景が違います。

夫婦が協力して子どもを育てるオオカミやキツネも哺乳類じゃないかとおっしゃるかもしれませんが、しかし彼らは肉食動物です。肉食動物は胃の中に食べ物を長時間保存していられるので、つかまえた獲物の肉をいったん飲み込んで、それを安全な場所に隠れている子どもたちに吐き出して与えることができます。しかも、毎日食べる必要がありません。でも人間はサルや類人猿の仲間なので、毎日食事をしなければいけない。ただ、夫婦共同でそのように子どもを育てるというのは、ものすごく大変なことなので、実はサルや類人猿には、人間の家族のようなものはありません。家族は、人間にしかないんです。

さらに人間の特徴は、単体ではなく複数の家族が集まって共同体を作る、いわば二重構造を

持っていることです。これがないと人間の家族ではありません。共同体を中心に、食物を共同で生産し、分け合って食べる。子育ても共同です。家族単体ではできないから、共同で行なう。このようにして人間の家族という形態が生まれたのだと思います。そして、これを維持してきたのは高い共感性です。共感性とは、人々の心を感じ、読むという能力です。

では、サルや類人猿と共通の祖先から出発したはずの人間の家族は、どのような必要性から生まれたのでしょうか。家族が作られるにあたり、どのような背景や条件があったのでしょうか。これを探るのが、わたしの仕事なんです。

■ 人間の赤ちゃんは不思議な特徴を持っている

その前にみなさんは、ゴリラはサルだと思っているかもしれませんが、サルではありません。ゴリラはヒト科 (Hominidae) という分類群に属します。オランウータン、チンパンジー、ゴリラはヒト科に属する類人猿で、遺伝子で言えばヒトと1.2%から1.6%ぐらいしか違いません。でもサルはヒトや類人猿と3%以上違います。ですから、サルとゴリラの違いのほうが、ゴリラと人間の違いよりも大きいと考えてください。

人間の祖先はゴリラやチンパンジーと同じような特徴を持って出発しましたが、彼らとは違った特徴を発達させて、現代まで至っています。その途中のどこかで、家族と共同体というものが出てきました。

ゴリラやチンパンジーは、アフリカにしか住んでいません。そこは熱帯雨林で、緑が一年中豊かで、フルーツなどのおいしい食べ物がある場所です。彼らはいまだにその場所から出ていません。人間の祖先も同じ場所で、おそらく同じような暮らしをしていたでしょう。でも人間の祖先は、あるときから世界中に分布域を広げるようになりました。その違いが、子どもの成長と子育てに表れています。そして、そこに家族の秘密が隠されています。

ゴリラと人間を比べてみましょう。ゴリラの子どもは、生まれたときはものすごく小さいんです。ゴリラは成熟すると、オスは200kg、メスも100kgを超えます。でもゴリラの赤ちゃんは1.6kgから1.8kgしかありません。人間の赤ちゃんは3kgを超えるから、それに比べるとはるかに小さいですよ。

ゴリラのお母さんはお乳をすくなくとも3年間与え、赤ん坊を1年間は腕の中で育てます。赤ん坊は、いつときたりともお母さんの腕から離れない。だから、ゴリラの赤ちゃんは泣きません。最初はお母さんだけが育てますが、お乳以外のものを口に含み始めると、お母さんは赤ちゃんをお父さんの元へ連れていきます。そして子どもを預け、さっさと自分のエサを食べに



行ってしまう。お父さんのまわりには、複数のお母さんから“委託された”子どもたちが群がっていて、まるで保育士さんのようです。お父さんは背中が白く、これは「シルバーバック」と呼ばれるのですが、とても上手に子どもたちを育てるんです。このように育てられるゴリラの子どもと比べると、人間の赤ちゃんは、不思議な特徴を持っています。

まず人間の赤ちゃんは大きい。そして、まったく泣かないゴリラの赤ちゃんとは違い、けたたましく泣きます。同時に、ニコニコ笑ってくれます。体重が重いと言っても、成長してから生まれたわけではなく、とてもひ弱で、自力ではお母さんにつかまれません。そして、成長が遅いです。ゴリラの赤ちゃんは5歳で50kgを超えますが、人間は5歳でも20kgを超えません。それにもかかわらず乳離れは早く、1歳や2歳でお乳を飲むのをやめてしまう。ゴリラは3歳や4歳になるまでお乳を吸っています。なんだかおかしいですよ。なんか、ここで変なことが起こっているような気がします。

実はオランウータンは、7年間もお乳を吸います。チンパンジーも5年。人間の子もだけが1年から2年でお乳を吸うことをやめてしまう。それにもかかわらず、6歳にならないと永久歯が生えてきません。オランウータン、ゴリラ、チンパンジーは、もっと早く永久歯が生えてきます。つまり、彼らは離乳するころには永久歯が生えているので、大人の食べ物が食べられます。でも人間の子どもの離乳後に生えてくる乳歯は、エナメル質が薄くて華奢だから、大人と同じものが食べられません。人工的な離乳食が豊富な現代とは異なり、農耕や牧畜が始まる前の人間は自然のものを加工して食べていたので、子どもに与える食べ物には苦労したはず。だから、たとえば蜂蜜とか、特にやわらかいフルーツとか、特殊なものを取ってきて与えなくてはならなかった。どうして、そのような手間をかけなくてはならなかったのか。人間の子どもも、6歳までお乳を吸っていたっていいじゃないですか。どうして人間の赤ちゃんは、早く離乳してしまったのか。それは、人間の祖先が熱帯雨林から抜け出したことに起因します。

■子育ては家族を超えて共同で担うようになった

人間の祖先は熱帯雨林から徐々に木の少ない草原、いわゆるサバンナへと出ていきました。一年中食物がある熱帯雨林とは異なり、サバンナで人間は、食物を得るのが難しいという事態に直面します。そういうときに有効に活用できたのが、立って二足で歩くという能力です。これは人間にしかない能力です。それによって遠くまで移動して食物を得、両手で安全な場所に運び、仲間と一緒に食べることができました。

人間はまた、大型の肉食動物に狙われるという危機にも直面しました。熱帯雨林では動物に襲われたら、木の上に登って安全な場所に隠ればよかったです。ところがサバンナでは、隠れ場所は限られます。そのうえ肉食動物が狙うのは、つかまえやすく、おいしい幼児です。

基本的に肉食動物の餌食になる動物たちには、逃げ足が早いなど、特定の特徴があります。そのひとつが、子どもをたくさん持つ、いわゆる多産です。多産を達成するには2種類の方法があります。ひとつは、7頭や8頭の子を持つイノシシのように、一度にたくさんの子どもの産む方法です。もうひとつは、シカのように出産間隔を縮めて何度も続けて産む方法です。人間は、後者を選びました。

出産間隔を縮めるためには、赤ちゃんを早くおっぱいから引き離さなければいけません。そして、赤ちゃんがおっぱいを吸わなくなって約2週間で、お乳は止まります。お乳が出ている間は、プロラクチンというホルモンが分泌されて排卵が抑制されますが、お乳が止まるとプロラクチンの分泌が止まり、排卵が回復し、次の子どもを産む準備ができる。こういうことを、初期の人類はやっていたに違いないのです。

ではなぜ、人間の子どもの成長は遅いのでしょうか。それは、200万年前に人間の脳が大きくなり始めたことと関係があります。人間の赤ちゃんの脳は生後1年間で2倍という、ものすごく速く成長します。5年間で大人の90%に達し、12歳から16歳で、大人と同じ大きさになります。脳はものすごくエネルギーを必要とする器官ですから、過大な栄養が必要で、脂肪を燃やして脳に栄養を供給するため、赤ちゃんは分厚い脂肪に包まれて生まれてきます。ゴリラの赤ちゃんは体脂肪率が5%以下でガリガリですが、人間の赤ちゃんがまるまる太っているのは、栄養の供給が滞ったときに脂肪を燃やして脳を守るためです。また、脳に多くのエネルギーを送り続けるために、本来は身体に回すべきエネルギーを脳に回しました。だから人間の子どもは、身体の成長が遅いのです。

脳の成長を優先させることは、人類進化のある段階から起こりました。生後に脳にエネルギーを回すと身体の成長速度は下降しますが、12歳から16歳で脳の成長が止まると、今度はエネルギーを身体に回すようになって身体の成長のピークが訪れます。このピークは女子のほうが男子より2歳早く、男子のほうが高いという特徴を持っています。そして、この、脳の成長に



身体が追いつく時期を「思春期スパート」と呼びます。人間は、思春期スパートの時期に繁殖力が急速に身につきます。同時にこの時期は、学習によって社会的な能力を身につける期間でもあります。

人間の死亡率は生まれた直後は高いですが、生後に親の目が行き届くと下降します。10歳を過ぎて親

の目が行き届かなくなると今度は上がり始め、思春期スパートの直後あたり、20歳前後で、ぐんと上がる。それは、この時期に心身のバランスが崩れて何か冒険をしたり、トラブルに巻き込まれたり、精神的に病んで死に至るケースが多いからです。重要なことは、この傾向が時代や民族、文化の違いを超えて共通だということです。

要するに、人間の子どもは早く離乳するものの成長が遅い時期があり、さらに脳の成長を優先させた結果「思春期スパート」という時期を迎える。この2つの時期を、母親だけ、あるいは母親と父親だけでは支えられず、家族を超えて共同体が担うようになった。つまり、「共同保育」になったわけです。

人間の赤ちゃんが泣くのは、お母さんが、重たい赤ちゃんを抱き続けていられなくて、どこかに置いてしまうか、他人の手に預けるためです。必然的にお母さんと離れなければならず、泣くのです。ゴリラの赤ちゃんはずっとお母さんの腕の中にいるから泣く必要がなく、不具合や不満を感じたら低くうなるか、ちょっと身動きすればお母さんは気づいてくれます。でも人間のお母さんは気づいてくれないから、一生懸命泣くわけです。そして、その声を聞いた大人たちは自分の子どもでなくても、泣きやませようと努力をする。そして気持ちよくなったら、赤ちゃんはニッコリほほ笑んでくれる。その天使のほほ笑みに、みんなだまされるんですね。それが人間の共同保育の秘密なんです。

まとめてみると、人類の進化史はこんな感じになると思います。まず、熱帯雨林から出て、直立二足歩行を始めた。これは食物を分配し、安全な場所でみんなで分け合って食べることにつながりました。そして、サバンナでは大型の肉食動物に出会い、多産を獲得せざるを得なかった。その500万年後に脳が大きくなり始め、重い子どもを産むようになり、さらに成長の遅さが加算され、共同保育というものが必然となり、共同体と家族という人間の社会の基本的な形ができあがった。これがわたしの結論です。

実は、人間の家族のような集団がサバンナでどのように暮らしていたのかを彷彿させる姿が、ゴリラで観察できたんです。ある1頭のお父さんゴリラが率いる総勢23頭の群れがあって、この中に、ケガで右腕を失った「ドド」という子どもがいました。右腕を地面につけずに歩くので、歩みが遅く、群れからはいつも置いてきぼり。群れが森を出てサバンナを行進して別の森に入ろうとするとき、遅れたドドが群れに追いつくまで、お父さんゴリラが何度も振り返っ



て待っている。そのとき、先に森の中に入っていった若いオスたちも、草むらから顔を出してドドの姿を見守っているんです。お父さんだけでなく、ほかのゴリラもドドのことを心配し、気遣っていた。こういうことは、人間以外には類人猿にしかできないと思うんですね。人間の祖先もこんなことを繰り返しながら、サバンナに進出し、家族の協力体制を強化していったのではないかと思います。

■人間の家族の不思議さを示すさまざまな現象

人間は共同の子育てを通じて、他者をいたわったり助けたりする能力を高めました。もうひとつ、高めた能力があります。それは、言葉のわからない赤ちゃんに対して、優しい音楽的な声を出しながら育児ができるようになったことです。優しい声を聞くことで、たとえ赤ちゃんはお母さんの腕に抱かれていなくても、あたかも抱かれているかのような安心感を覚える。そういうことを、人間は始めたんじゃないかと思うんです。おそらく人間が言葉を発するずっと以前から、音楽でコミュニケーションを取る方法はあったんでしょう。それが共同保育の中で出てきたというのが、わたしの仮説です。

いろいろな民族音楽を聞いて感情を揺さぶられるのは、音楽が民族や文化を超えて同じように気持ちを伝えるものだからでしょう。お母さんと赤ちゃんの心をひとつにできたように、音楽によって人間は心をひとつにし、共同で行動できるようになりました。一人では立ち向かえなかった危険に立ち向かい、あるいは悲しみや怒りを分かち合う。これは人間だけが持ち得た、大きな社会的な力だったと思います。それは共同の育児から生まれ、大人の間にも普及することによって鍛えられたのではないかと思います。

今、家族が崩壊の危機に瀕していることは、みなさんも日々感じていることだと思います。先ほど原島先生がおっしゃったように、いろいろな家族の形があるため、どんな家族がいいのかわからなくなっています。もちろん、家族の役割がなくなったわけではありません。家族を支えるコミュニケーションの形式が変わったために、家族が見えなくなってしまったんです。これまで家族や共同体では、音楽や身体を使ったさまざまな活動が、人と人との接着剤の役割を果たしてきました。

人間は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感を持っています。このうち、科学技術によって拡大されたのは視覚と聴覚です。なぜなら、人間が生活する集団の規模が巨大化するに従い、情報を処理する能力を高める必要があったからです。しかし、人と人とを結びつけていたのは視覚や聴覚ではなく、そのほかの嗅覚、味覚、触覚なんですね。それを使ってでしか、人間は信頼関係を紡ぐことができません。もちろん視覚や聴覚を使ってもできますが、それはほかの3つの感覚よりも力が弱いんです。視覚や聴覚は情報は伝えますが、信頼を伝えることはでき

ません。

家族が崩れ始めたのは、いろいろな原因があるのでしょう。少子高齢化で共同の子育てが物理的に困難になったこともあるでしょうし、ファストフードや中食ができて、自分の好きなものを自分勝手に食べることができるようになり、みんなで一緒に食べるという社会的な空間がなくなったこともあるかもしれません。しかしいちばん大きいのは、コミュニケーションが変わったことだと思います。スマホやインターネットなどの電子空間でつきあうようになって、家族が見えなくなり、見えるのが仮想的な集団だけになってしまうと、人間社会は大きく変わるとわたしは予想しています。

家族、あるいは地域社会というものが見えなくなると、個人の行為は、どうしても効率化・経済化・機械化の方向に向かわざるを得ません。家族という、えこひいきが当たり前の、見返りを求めない奉仕をするような集団がいなくなると、人間同士は利害関係で結びつくようになります。つまり、共感能力を使って築いた信頼関係ではなく、自分の利益を高めてくれる相手と一緒にいたり、自分たちの利益をおとしめる人は排除したりする傾向が強まる。そうすると社会が閉鎖的になっていきます。今のアメリカ社会が直面しているのは、この閉鎖した社会への移行だと思っていますが、日本もそうならざるを得ないのではないかという気がします。

家族という観点から考えると、人間は実に不思議なことを行なっています。食事のとき、動物は自分の食べ物をほかの仲間に奪われないようにするし、隠れて食べるものもいます。食は個人的な行為のため、公開されません。その代わり、性は一般に公開して、誰が見ていようと堂々と交尾をします。これが動物のセックスです。人間は、まったく逆です。食事は公開することが基本で、セックスは隠します。人間が動物と真逆なことを始めたのは、「家族」と「共同体」という、編成の異なる組織を両立させるためだと思います。

人間は家族を、見返りを求めない奉仕を中心とした集団として維持するため、“生みの親より育ての親”という原則を作りました。これは、サルから受け継いだ能力です。生まれたばかりのサルは、お母さんを代えてしまうと、生みの親ではなく育ての親を認知して育ちます。そして成長すると、育ての親に対しては性的な衝動を覚えなくなる。これは「ウェスターマーク効果」と呼ばれている現象です。

同じサルや類人猿の仲間でも、オスが子育てをしない社会では、生まれたメスは父親を認知せず、普通に交尾をします。ところが子ども時代に一定時間、オスが親密に世話をするような社会では、メスと育ての親は性的な交渉をせず、ともに避けるようになります。小さいときのケアによって、性的な忌避関係が生まれるわけです。それを人間は、ルールとして社会で守ってきた。これが「インセスト（近親相姦）禁止の規範」というものです。この規範があつてこそ、家族と共同体が成り立つ。だから、子どもが結婚して新しい家族を作っても、元の家族との関

係を失わず、さらに、結婚相手の家族と自分の家族を結びつけることもできる。これは、人間だけが持っている大いなる能力なのです。

そしてもうひとつ、人間の家族の不思議さを表す現象があります。チンパンジーのメスには人間と同じような月経周期がありますが、排卵の前に2週間ほど、お尻が桃色に膨れます。そして、これを目にしたオスはこのメスに群がり、乱交状態になります。これはチンパンジーだけで、人間もゴリラもオランウータンも、このような特徴は発達させませんでした。そういうなかに、家族というものが作られたのではないかと考えています。

類人猿は、オスとメスがどのくらいの期間、一緒にいるかという点で、長期配偶と短期配偶の種に分かれます。オランウータンは交尾のときだけは一緒にいますが、あとは別々です。ゴリラは、オスが複数のメスと一緒に長期配偶関係を結びます。現代人も特定の男女が長期にわたって夫婦関係を築きます。チンパンジーとボノボだけが乱交型です。この乱交と、発情兆候が表れるという2つの特徴は、チンパンジーとボノボだけにセットになって現れたに違いないとわたしは考えています。

チンパンジーやボノボなどの乱交型は、体重に比べて睾丸が大きいのが特徴です。それは、交尾の相手が特定のメスに限定されないから、オスはたくさん精子を生産して、ほかのオスの精子と競わなければならない。そのため、睾丸が大きくなったんですね。一方、特定のオスとメスが一緒に暮らすような社会を作る種は、オスの睾丸が小さいんです。

ところで、1頭のオスと1頭のメスが夫婦生活を長く送る霊長類の種は、オスとメスの体格がほぼ同じです。ですが、人間は男性のほうが大きい。だから霊長類の常識に従うなら、人間社会の原型はペアではなく、オス1頭と複数のメスカ、オスもメスも複数だった可能性が高いのです。

人間の家族というのは、まず親族の集団があり、そこから男性や女性が新しい家族を作って出ていきます。そして重要なのは、個人が集団間を行ったり来たりできることです。チンパンジーやゴリラは、オスもメスもいったん集団を離れたら、二度とその集団には戻れません。つまり、“身体という接着剤”でつながり合っている彼らは、いったんそれが切れ、遠くに行けば仲間の匂いもなく、仲間と接触することもできなくなりますから、集団間の絆は切れてしまう。でも人間は、それをいったん切り離して別の接着剤を持ったかゆえに、行き来ができるようになりました。人間は身体だけで結びついているのではない。これが、人間が、広くいろいろな集団を渡り歩くことができるようになった能力の現れなんです。



■必要なのは直観力や共感力がもたらす「野生の思考」

さて、今日のサブテーマは「ゴリラからAIまで」です。果たして人工知能は家族を作れるのかということについては、ぜひ原島先生にお聞きしたいと思っておりますが、わたしの意見を申し上げますと、AIは食物を食べません。人間は毎日食事を取らなければならない、食事を使って人間関係を維持しています。人間は、食物を社会的な道具として集団を作ってきました。そういうことが、食欲を感じないAIにできるだろうか。そして、相手の食欲を感じながら食物を分配して一緒に食べ、その興奮や満足感をともに味わうことができるだろうか。

もうひとつ、社会を表す重要な要素の性に関していえば、人間は性的欲求を感じるとともに、禁止することもできます。欲求を感じたからこそ禁止というルールを作り、それが、社会的な秩序を維持する自覚につながっています。このようなルールを、AIが作れるか。まずできないと思います。とりわけ、恋愛というのは人間だけが持っている変な感情です。特に、プラトニックラブでは基本的に子孫を作れませんから、生物としてこんなバカげた方向に進化するはずはないんです。でも人間は多大なお金と労力と時間をかけて、成就するかしないかわからない、おそらく成就しない異性に対して、猛烈な情熱を燃やします。これは一体、何なのでしょう。でもこういうことがあるからこそ、人間は生きていける。生きる情熱と恋愛の感情は非常に近いところにありますが、これをAIは感じるができるだろうか。

もうひとつ、AIは子どもを産めません。もちろん男性も産めませんが、しかし高い共感能力によって、また子育てを共同で行うことによって、自分の子や他人の子の区別なく、子どもに対する愛情を感じることができます。そういうことを、AIはできるでしょうか。

さらにもうひとつ、家族と共同体という、相矛盾する論理を持った組織の中には、いろいろな対立概念があります。たとえば、自分の子どもがほかの子どもとトラブルを起こした場合、親としては自分の子どもをかばって、援助したいでしょう。でも組織の中では、あえて自分の子どもを叱る必要もある。「援助」を取るか、「叱責」を取るかを選ばなくてはいけない。これは人間自身が、必要に応じて招き入れた社会の複雑さです。それを乗り切らなければ、人間は家族と共同体という別々の組織を両立させることができなかつたのです。そのために人間は直観力と共感力を鍛え、行使してきました。こうした行為を、AIが導き出すことができるだろうか。

わたしは、通信情報テクノロジーというのは、非常に有効なものだと思っています。巨大な都市で生きるには、いろいろな情報を効率的に使い、分析し、賢く使っていく必要があります。そのためにITは重要です。われわれは今、ネットワーク社会という、非常に楽な社会に生きています。ネットワーク社会は、昔のようにしがらみで結びついた社会ではないので、参加しやすく抜けやすいという利点があります。

一方で、人と人が、線でも面でもなく点で結びついているため、信頼関係が醸成できないと

いう欠点があります。ですから、現在のわれわれは不安の時代に生きていると言えるんじゃないでしょうか。今は安全・安心の時代と言われていますが、安全は科学技術でなんとかできます。しかし、いくら安全な環境で暮らしていても、安心は人がもたらすものだから、人との信頼関係が失われれば不安は増幅します。たとえば、実際に和歌山県であったカレー事件のように、安全な食べ物だと思っていたら誰かが毒を入れていたとか、駅で誰かに押されるかもしれないとか。そういう不安を抱えていたら道を歩けなくなるし、電車にも乗れなくなってしまう。

家族や共同体が個人の周囲から消えていこうとしている現在、個人は裸にされ、行政や国家と向き合わざるを得ない。だから、保険や法などで自分を守る。そういう時代に今、われわれは直面しているのではないかと思います。そのときに必要なのは、野生の思考です。つまり、次世代を作るという生物学的な業務に携わっていくにあたり、まだ文明を経験しなかつた時代から人間が持っていた直観力や共感力に基づく思考を取り戻すことです。人間はその2つの能力によって、予想外の事態を乗り切ってきたわけですから。そのためには、自然と接することや、過去の経験では判断できない事態をもっと積極的に経験することによって、直観力や共感力を鍛える必要があります。音楽でもいいし、スポーツや食事でも、身体を使つての労働でもいいので、とりわけ視覚と聴覚以外の3つの感性を活用し、人と人との信頼関係をもう少し作り出すことが必要です。

さらに、わたしはこれからの時代を生きるには二重生活もいいと考えています。住民票を2つ持ち、都市と田舎に自分の所在地やアイデンティティを振り分けることです。今の都市は子育てに適当な場所ではないし、老人が生きやすい場所でもない。ですから、都市とは違う場所に、人と人がつながり合い、共同で子育てができるような場所をしっかりと確保し、そこでも権利と義務を行使しながら二重生活をするというのが、これからの賢い生き方ではないかと、そのようにも思います。家族は自然から生まれたものであり、自然と人間との賢い接点になり続けてきた、人間の大きな社会的な力だと思います。それを失ってはならないというのが、今日のわたしの結論でございます。時間になりました。どうもありがとうございました。



山極 寿一（京都大学総長・霊長類学者・人類学者）
1952年東京生まれ。1975年京都大学理学部卒業、1980年同大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。理学博士。日本モンキーセンター、京都大学霊長類研究所、同大学院理学研究科助教授を経て同研究科教授。2014年10月から京都大学第26代総長に就任。2017年6月から国立大学協会会長、同年10月から日本学術協会会長に就任。ゴリラ研究の第一人者。『「サル化」する人間社会』（集英社インターナショナル）、『家族進化論』（東京大学出版会）、『京大式おもしろ勉強法』（朝日新書）など著書多数。